富沢寿勇著

『王権儀礼と国家——現代マレー社会における政治文化の範型——』

東京大学出版会　2003年　viii＋322＋xxxページ

加藤　剛（かとう　つよし）

Ⅰ

東ティモールを含む東南アジア11カ国のうちには，現在，王を戴いている国が４つある。カンボジア，タイ，ブルネイ，そして富沢が研究対象とするマレーシアである。世界の諸地域を見渡す時，11分の４という割合が高いのかどうかについて確信はないが，世界各国事情年鑑のようなものを繰ってみると，絶対数からいえば，東南アジアは西ヨーロッパ，中東地域に次いで世界で３番目に王の数が多い地域といえる。マレーシアの場合，５年に一度任命される国王の選出母体として９人の王（ラジャ）ないしスルタンが存在するゆえ，これも勘定に入れるとすると，東南アジアは世界で一番「王」の多い地域であり，その中でもマレーシアは世界でもっとも王の多い国である，ということになりそうである。

どうしてそうなのかを理解するには，東南アジアに王国は存在したが帝国は存在しなかったことを踏まえ，植民地時代以前に存在した諸王国の政治経済基盤，あるいは宗教，特に上座仏教とイスラームの政治的枠組み，さらには19世紀から20世紀初頭にかけての世界情勢下における在地権力と植民地権力との歴史的な関係等を考察する必要があろう。たとえば，同じ東南アジアでイギリス植民地支配を経験した国の中にあっても，18世紀半ばから19世紀末にかけて現在のミャンマー（ビルマ）全体で大きな力を振るったコンバウン朝はイギリスとの３度に及ぶ戦いに敗れて滅ぼされ，他方，マレー半島海岸域に並立・乱立していたスルタン国，あるいはイギリスの圧倒的海軍力に囲まれ，海域立国の基盤を失ったブルネイの王権は維持されたというように，内外の諸状況をあい合わせて考える必要がありそうである。

本書における富沢の関心は，しかし，現代マレーシアになぜ王権が存在するのか，あるいはマレーシアになぜ王が多いのかではない。むしろ，王の存在は，以下に紹介する研究の与件であり，出発点である。

Ⅱ

本書の基は，2002年に東京大学大学院総合文化研究科に提出された学位請求論文『現代マレーシア国家における王権儀礼——ヌグリ・スンビランを中心とした人類学的考察——』である。本書のタイトルと学位請求論文のタイトルには２つの言葉が共通している。「現代」と「王権儀礼」である。これは，時間的枠組みとしての現代とともに，研究対象として王の実権や政治的影響力ではなく王権儀礼が富沢の論考において担っている中心性を示している。著者の言葉を借りれば，「本書は，王権儀礼の民族誌的記述・分析を通じて，東南アジアのマレー社会における政治文化の範型（パラダイム）を探り」，「現代マレーシア国家における王権の位置と役割を解き明か」そうとするものである（1，18ページ）。この目的を達成するために，本書は次のような構成を取っている。

序論

Ⅰ　概念の整理と予備的考察

第１章　マレー社会と王権——マレー人とは誰か？——

第２章　マレー社会における共同体理念の諸潮流

第３章　王権，儀礼，国家の関係

Ⅱ　ヌグリ・スンビラン王権神話・儀礼の考察

第４章　ヌグリ・スンビラン王権の神話論的構成

第５章　ヌグリ・スンビランの即位儀礼に見られる王権の理念構成

第６章　拝謁儀礼および叙勲儀礼の現代的意味

Ⅲ　現代マレーシアにおける王権パラダイム
　第７章　マレーシア国王制度のローカルな基盤とグローバルな枠組
　第８章　国王の就任・即位儀礼を通して見た国家
　第９章　「先住民」，中間層，エスニシティと王権
結び

「本書の焦点は，あくまで王権の現在的位相におかれている」(13ページ）とされているように，上の構成のうち研究の中心は第Ⅲ部であるが，以下では，本書の内容を上記の構成に沿って見ていくことにしたい。

序論では，政治人類学，象徴人類学を中心とする人類学的研究において，儀礼，なかでも権力をめぐる表象がこれまでどのように理解され，研究されてきたかを概観し，同時に本研究が，理論的，方法論的にどのような特徴を備えているかを説いている。それは，儀礼を，非言語的行為と言語的行為――たとえば，王権神話や儀礼関係者の儀礼に関する説明――の両要素から構成されたものとして捉えることであり，儀礼の背後に控える政治性，イデオロギー性に注目することである。後者については，儀礼，なかんずく権威の儀礼が，被治者が進んで権力を受け容れるような「非暴力的強制力」ないし「ヘゲモニー」的支配としての政治概念を，一定期間ごとに反復して可視化する装置だからである。

上のような全体的枠組みを出発点として，第Ⅰ部では，現代マレーシアに見られる国王のあり方は元々マレー王権が基になっており，したがって歴史・政治・文化的にマレー社会と不可分なことから，マレーとはなにか，マレー人とは誰かをめぐるこれまでの研究を整理し，マレー王権，儀礼，国家のあり方とその相互関係の特徴を，歴史的，研究史的に概観している。ここでの結論は，「マレー」は，元来，「王権という階層，ヒエラルキー上の頂点と密接に関連した出自や出身地に基づく社会範疇の性格が強いもの」(30ページ）であり，これが19世紀最後の四半世紀から本格化するイギリス植民地支配のもとで民族範疇のように扱われるようになるが，「マレー人」とは誰かの理解そのものは多元的であり，かつ一定ではなかったと指摘する。これとの関係で重要な出来事は，1874年にイギリスがマレー半島西岸のペラ王国のスルタンと結んだパンコール条約である。その後，他の王たちとも結ぶことになる同様の条約のモデルとなったもので，スルタンの権限はマレー人の宗教（イスラーム）と慣習（アダット）の範囲内に限定され，徴税権，警察権などはイギリス人理事官が掌握する，という内容であった。これにより，「マレー人」を宗教，慣習，王権によって規定する認識枠が政治的に明確にされ，さらに「マレー人」の解釈をめぐるゆれや変異にもかかわらず，「いわば『マレー人』を，王権を不可欠なものとして定義づけ，固定化する方向性に制度的根拠が与えられた」(35ページ）のである。

このようにマレー社会における王権の意味，さらにはこれを研究する意義を位置づけたあと，富沢はマレー王権や儀礼を考察するうえでの２つの分析軸を提示する。ひとつは，「マレー人」を称する人々が指向する共同体の性格にかかわるもので，これは「マレー人」の用法に見る多義性とも関係している。歴史家Ａ・Ｃ・ミルナー（Anthony C. Milner）によると，19世紀半ばから20世紀初頭にかけて立ち現れてくる「マレー人」知識人の言説から３つの共同体理念が析出できるという。すなわち，特定のスルタンを中心とする共同体ないしスルタン国家（マレー語ではクラジャアン［kerajaan］），イスラームを中心とするムスリム共同体，「マレー人」を中心とする民族共同体である。もうひとつの分析軸は政治人類学的なもので，社会構造や政治組織における権力分布にかかわり，不等原理（たとえば専制政治）と平等原理（たとえば民主政治）に類別される。共同体の３理念との関係では，クラジャアンが不等原理を，民族共同体と特にムスリム共同体が平等原理を体現するものとして，富沢は扱っている。

２つの分析軸を用いて富沢のマレー政治文化の規範に関する研究関心を言い換えれば，かつては個別のクラジャアン（王国，文字通りには王（ラジャ）が存在する状態）において不等原理を中心的に体現していたと

思われる王権と王権儀礼が，民主的な立憲君主国である現代マレーシア国家のそれに，どのように接合されているか否かを検討することである。この検討において，共同体理念に関する3類型，権力分布に関する2類型をかならずしも相互排他的なものとして捉えるのではなく，王権儀礼における類型間の遷移を認め，その歴史的な動態を探ろうとしている。

第Ⅱ部と第Ⅲ部は，上記分析軸と分析態度を応用した，具体的な王権，王権儀礼に関する検討である。第Ⅱ部では，マレー半島のクラジャアンないしヌグリ（国ないし行政用語では州）のひとつ，ヌグリ・スンビランを取り上げている。ヌグリ・スンビランに注目する理由は，この地域で一般的な母系親族制度と父系原理で継承される王位の並存が王権神話や王権儀礼においてどのように表現されているかといった興味以外に，なによりも現代マレーシアに見る国王のあり方や選任法が，ヌグリ・スンビランのものを基に着想されているからである。それは，国王の選任にあたっての諸王間の合議ないし互選，そして国王の称号として，スルタンではなくヤン・ディプルトゥアン・アゴン（最高者となされしもの，通称アゴン）というヌグリ・スンビランの王称に範を取る受動態的称号が採用されていることである。この説明からも想像できるように，第Ⅱ部では先住民性と外来性（異人性），支配者と被治者間の差異化と連結化といった王権一般をめぐる話題も取り上げられているが，ここでの一番の関心は，ヌグリ・スンビランというクラジャアンの王権，神話，儀礼に見る権力分布の表象である。

第Ⅲ部では，1957年に成立した国民国家マレーシア（独立時はマラヤ連邦）における王（アゴン）権と王権儀礼の形が検討されている。第Ⅲ部の議論においても権力分布が中心的話題であり，その中で民主主義的イデオロギーからの圧力だけでなく，イスラーム主義のもとでのムスリム共同体を指向する人々，あるいはマハティール政権下で拡大したマレー人中間層に認められる民族共同体指向においても，王権の表象に見る不等原理への批判が高まったことを示す一方で，マレー人都市中間層は同時に，王権の表象を含むマレー文化産業の消費者でもあることを示し，王権儀礼における平等原理と不等原理のせめぎあいは，どちらかが一方的に優勢となる過程として捉えることはできないことを指摘している。

本書の結論として，「結び」の最後の段落から，次の文章を引用しておくことにする。「本書では王権パラダイムという表現で，とりわけクラジャアン・イデオロギーのマレー世界における根強さと持続性を強調してきた。…（中略）…こうして王権はさまざまなイデオロギー潮流の波に揉まれながらも，適宜『衣替え』しながら，巧妙にその重心を序列原理，不等原理の方向に押し戻す構造を更新し続けてきた部分が大きい」（315ページ）。

Ⅲ

まず以下では，本書が明示的に研究対象としていない事柄を2つ指摘しておきたい。王権ならびに王権儀礼に関係して比較的近年に発表され，評判となったものに，富沢も何度か言及しているキャナダイン（1992）とフジタニ（1994）の研究がある。前者はイギリスの王／女王，後者は日本の天皇について考察し，それぞれ王制から議会制，幕藩体制から天皇制への大きな政体変換期，それも同時に大きな社会経済変革期であった時代に，王権がどのように表象され，変容するにいたったかを検討している。しかし，サブタイトルによって研究の焦点を「現代マレー社会における政治文化の範型」に絞り込み，「王権の現在的研究を補足する意味で，必要かつ可能な範囲で歴史的考察を付加していく方法」（13ページ）を採り，政治文化の範型に関する結論として「クラジャアン・イデオロギーのマレー世界における根強さと持続性を強調」する本書に，フジタニたちのような研究関心，たとえば植民地時代前から植民地時代への変換期にヌグリ・スンビランの王権をめぐる表出がどのように変化したかを期待するのは適切ではない。

学位請求論文のタイトルにあった「現代マレーシア国家」という言葉が，本書のタイトルからは消えているが，その理由は本書の内容を考えれば想像がつく。クラジャアンにおける王権儀礼は，個々のク

ラジャアンのマレー社会の枠組みの中で構成されていたと考えられる。他方，マレーシアの国王をめぐる儀礼は，たとえそのパラダイムがマレー王権に根ざすものであっても，マレーシア社会，すなわちマレー系だけでなく，中華系，インド系などを含む国民国家の枠組みの中で構成されているはずである。しかし，本書のサブタイトルが「現代マレー社会における」との限定を課し，さらに主要分析軸である共同体をめぐる３理念が「マレー人」にかかわるものであることからも推察できるように，華人やインド人などにとっての王権や王権儀礼の意味は，本書では研究対象の外に置かれている。

かならずしも明示的に考察から除外されているわけではないが，本書が研究対象外としているもうひとつのものは，扱われている王権儀礼の性格にかかわるものである。本書が研究対象とする王権儀礼は，即位儀礼に代表される，宮廷を中心に挙行され，王権そのものにかかわるきわめてフォーマルな儀礼である。王(権)がかかわるであろう他の儀礼，たとえば国民国家レベルでいえば，独立記念日式典，議会開会式，首相任命式などにおける国王の役割が話題にされることはない。また，評者がヌグリ・スンビランの農村で調査をしていた時，村のモスクの竣工式に王が主賓として出席し，イスラームの断食月明けの祭り時に王宮がオープンハウスになると聞いて驚いたことがあるが，これらのややインフォーマルな儀式は言及されておらず，華人やインド系の祝祭における国王ないし王の役割，あるいはそうした役割の有無も考察の俎上にはのぼっていない。儀礼の意味については，儀礼執行当事者の解釈が時に挿入されることはあっても，基本的に解釈は富沢の視点からなされたものが中心である。ヌグリ・スンビランの一般の人々，あるいは一般のマレーシア国民が王権および王権儀礼をどのように捉えているかについては，わずかにマレー人中間層という括りにおいて検討されているに過ぎない。以上は，本書に関するいわば「ないものねだり」の読後感である。

他方，本書は３つの意味で，マレーシアの王権研究における斬新な試みとして高く評価できる。ひとつは，ヌグリ・スンビランというクラジャアン・レベル，マレーシアという国民国家レベルにおける王権と王権儀礼を，個別のレベルに分節化して議論するのではなく，両者を連結させて考察し，王(アゴン)権の出自と性格を明確にしていることである。

もうひとつは，これまでのマレーシアの王権に関する論考は，ややもすると，脱歴史化されたクラジャアンにおけるマレー王権の理念的な議論か，1980年代から90年代半ばにかけてマハティール政権下で見られた，国王･王たちと行政府との間の国王･諸王の特権の規制をめぐるせめぎあいに関する時事政治的な議論に二極分解していた観があるが，本書は，王権儀礼を中心的テーマとして，「現代」に焦点を合わせながらも，19世紀後半から20世紀末までの約１世紀余りの時間を歴史的に繋げて議論し，王権をめぐる動態の諸相を示している。その中での知見のひとつは，ここでは詳しい説明は省くが，不動の王から動く王への変化にかかわるものである。

３つ目は，人類学的フィールドワークと文献調査の融合である。この融合から，ヌグリ・スンビランのレベルにしろ，マレーシアのレベルにしろ，現代マレーシアにおける王権儀礼のあり方は，新経済政策におけるブミプトラ(「土地の子」)の概念，マレーシアの経済発展，あるいはイスラーム主義の拡大とも連動して再編されてきたことがよく理解できる。往々にして静態的かつ同語反復的な見方に陥りがちな王権儀礼の議論にあって，これは本書の特筆すべき特色である。

東南アジアにおいて王を戴くカンボジア，タイ，ブルネイ，マレーシアのうち，王権の歴史的・制度的基盤が強固なのは後者の３カ国であろう。その中で政治的実権が希薄であり，かつ政治プレーヤーとしての存在感が薄いのは，おそらくマレーシアの王ではないだろうか。これは，カンボジアのシアヌーク前国王と比較しても明らかである（ちなみに，新経済政策以降，経済・投資プレーヤーとしてのいくつかの王家――これにはヌグリ・スンビラン王家も含まれる――の存在感には顕著なものがある)。逆にいえば，マレーシアの政治運営，異なる利害を持つ政治組織間の調整は，現在までのところ，既存の政治的法律的枠組みの中で十分対応可能である，と

いうことであろう。他方，国民中の特定民族（マレーシアの場合，マレー人）の優位性を誇示・維持するうえで象徴的にもっとも重要な役割を担っているのは，（マレー人が国民の圧倒的多数を占めていない）マレーシアの王であるといっても過言ではない。その意味では，富沢は，東南アジアの中でも王権儀礼を研究するにもっとも相応しい国を選択したということになろうか。

文献リスト

キャナダイン，D．1992.「儀礼のコンテクスト，パフォーマンス，そして意味――英国君主制と『伝統の創出』，1820－1977年――」E．ホブズボウム・T．レンジャー編『創られた伝統』（前川啓治・梶原景昭他訳）紀伊國屋書店.

フジタニ，T．1994.『天皇のページェント――近代日本の歴史民族誌から――』（米山リサ訳）日本放送出版協会.

（龍谷大学教授）